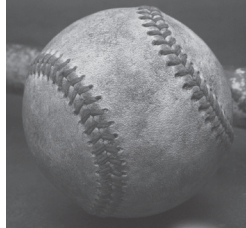


経営と健康



ミスターよ永遠なれ「長嶋茂雄物語」

講談師 一龍齋貞花

へ巨人の陣屋より現れました豪傑、鎧の胸元押し広げ、胸毛を夜風にソヨとなびかせながら天地に響けと大音声

「ヤアヤア遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見憶えこの胸毛、我こそはミスタージャイアンツと呼ばれし巨人軍随一の豪傑長嶋茂雄なり、いで目にも見せてくれん」

と呼ばればワツと上った大歓声。

この時ザドベック村山少しも騒がず、「いで来たれ」と、大上段に振りかぶつた。ボールカウントはヨシ2本、ダメ2本、すなわちツーエンドツー、

「ここぞ勝負どころなり」と、

猛虎軍の新鋭村山気性激しく烈白の気合をこめて、

「エーイ」と投げ込んで参りました快速球。

「オーウ、きたかチョウサン、まっつたほい」

デイツとバット一閃、打球はグリーングリーンと伸びて左翼中段の棧敷席へと飛び込んだ。

ダイヤモンドを一周する長嶋茂雄の目にキラリと光るものがあります。

それは喜びと感激の涙か、はたまた宿敵を思う友情の涙でありましょうや。その夜村山実は宿舎で、天皇陛下の恩賜の煙草をはじめて口にしたが、それはにがく辛い味でしかありませんでした。

燃える男長嶋の本領発揮、今も語り継がれます昭和御前試合。

時はいつなんめり昭和34年6月25日、後楽園球場には満員の観衆を集め巨人―阪神11回戦。ポン

天皇、皇后両陛下をお迎えしてプロ野球史上初の天覧試合。

正に昭和御前試合にふさわしく逆転、逆転又逆転。ポポンポン

追いつ追われつ手に汗握る熱戦を展開。両雄相ゆずらず4対4の同点で迎えた巨人軍最後の攻撃でした。

覚えていらつしやる方多いと思います。テレビの収録伊豆大仁の自主トレ、こたつを囲んでこの私の講談に長嶋さん、ひつくり返つて大受けでした。

このホームランによつて日本のプロ野球は全盛時代を迎えたのでございます。私の野球講談もこれによつてお陰様で以後選手物語を次々と放送。「プロ野球武將列伝」の連載（週刊ベースボール）そして出版（講談社）と実に有難い天覧試合でした。

このミスター死去。野球講談で振り返ります。

20世紀を彩った現代の英雄

千葉県佐倉に生れた長嶋は、中学時代まで身体も小さくショートで一番。佐倉一高に進みエラーばかりしていたので三塁転向。身体はどんどん大きくなり3年の時四番で主将、夏の甲子園予選出場、当時は一県一校の出場ではありません。熊谷高校との一戦、卒業後東映フライヤーズに入団する福島投手から大ホームラン。この一発で巨人から50万円の契約金で誘われます。

前年西鉄に入団した怪童中西、続いて水戸つば豊田も50万円、甲子園で活躍した二人と無名の長嶋が同じ額。

長嶋の望みは東京六大学。しかも巨人のサードは後に国鉄、大毎で監督を務める名手宇野がいた。入団しても出られないとかくして立教大学へ。

本屋敷錦吾、杉浦忠という素晴らしい選手と出会った。

「すごい選手だ」と長嶋が舌を巻けば、

二人も「将来の四番はこの男」と、お互いを認めあつたこの三人が、立教三羽鳥と呼ばれるようになります。

暗くなればボールに石灰をまぶしての猛練習。砂押監督のスパルタ訓練によつて育て上げられ、二年生の秋にはベストテン3位。アジア大会にも大学選抜チームの一員に選ばれ順風かと思いきや、猛練習や新人起用に上級生が反発、排斥運動の急先鋒が主将大沢親分。

遂に恩師砂押監督退陣、チーム内のごたごたから嫌気がさした長嶋、杉浦、本屋敷の三人合宿を抜け出し挙母（トヨタ市）の杉浦の実家にころがりこみ大学を中退してプロ入りしようと、ドラゴンズの門を叩いた。

「頼もう」「ドレー」
応対に出たのが高田代表代理。

「ご当家へ仕官致したくまかり越しました。これなる杉浦は三河の国挙母の出身、何卒お召し抱え下されたく」

「左様か、しかし其方達の仕官をこばむものでもないが、学問を修めてからでも遅くない。その時には必ず取立ててつかわずぞ」

もしこの時三人が中日入りしていたならば、日本プロ野球の歴史も大きく変わっていたことでしょう。

三勇士、いかにも残念だが致し方な

し、再び学び舎へと戻つたのでございます。後でこの話を聞いた中日のエース杉下茂は、「惜しいことしましたなあー」この話は後に杉下さん、杉浦さんからお聞きしていますので、講釈師の作り話ではございません。

その後長嶋は大活躍。巨人にどうしても勝てない南海山本監督（後に鶴岡姓）は、なんとしても長嶋、杉浦を獲得しようとして東京遠征の度ごとに二人に寿き焼きをご馳走し小遣いを与え、佐倉の自宅へ病弱のお兄さんの菓を届けます。杉浦さんにお小遣い貰ったんでしょと言うと、「ヘッヘ……よく知ってますね」「鶴岡監督からそれとなく伺いました」。

大毎オリオンズの永田雅一オーナーも自ら佐倉へ足を運んだほど。

大学四年の時、岐阜商業へコーチに。この時二塁を守る高校一年生の見事なグラブさばきに、

「あの男、5年後には日本一のセカンドになるぞ」

その一年生こそドラゴンズの名選手高木守道でありました。

長嶋巨人入り

東京六大学新記録のホームランで長嶋株は一気に上昇、長嶋の心は南海に

傾いた。スポーツ新聞も、「長嶋、杉浦南海入り濃厚」と二面に書き立てる。

しかし巨人が六大学の人気者をなんでも黙つて指をくわえておりましょう。

猛烈な巻き返しを展開。

「お母さん。お兄さんはお身体が弱いようですね。その上茂雄君に遠くに行かれては心配でしょう、お兄さんの面倒は読売で見させて頂きます」

「お兄さん、考えて下さい」

新幹線開通前です。母と兄に的をしぼり遂に長嶋は巨人入り。

へ空前絶後の花形選手長嶋茂雄の英姿を一目見んものと後樂園球場には4万5千の大観衆を集め、昭和33年度プロ野球ペナントレースの開幕ナリ ポン

巨人対国鉄の第二戦、一回裏ツーアウトランナーなし、打席には新人ながら三番に拔擢された若武者長嶋、
「おのれ猪口才な小童め、我が快速球打てるものなら打つてみよ」

その名を聞いただけで泣く子も黙ると言われる金田正一。マウンド上に仁王立ち。左手をぶるんぶるんと振るわせた。と今迄沸きに沸いておいておりました大歓声がピタリとやんだ。

正に嵐の前の静けさと申せましょう。

「金田といえど何ほどのことやあらん。この豪傑打ちのめし我初陣を飾らんかな」

ここに金田、長嶋世紀の一騎打の幕が切つて落されたり。ポポンポン

第一球内角高目の快速球 空振り、バットが空を切り歓声とため息。

二球目外角低めに鋭いカーブ「ストライク」

三球目外角低めのカーブ、ボール四球目 内角高目の快速球、思い切りバットを振つたが空振り三振。

場内騒然とする中、金田悠々とマウンドを降りました。続く三打席も力一杯立ち向つていったがあえなく4打席4三振。「思つてもみなかつたこの結果。金田の前にスゴスゴ引き退らねばなりませんでした。しかし金田は、

「スピードがあつたから打たれる心配はなかつたが、長嶋は四打席とも全力で振つてきた。これは並大抵の新人ではないぞ」

球史に残るデビュー戦のこの対決はプロ野球黄金時代の華やかな幕開けとなりました。その後の大活躍は次号連続に申し上げます。 ポンポン